

教育クラブ

松茂 長原小の日本語指導

小規模生かし細やか支援

徳島県内の学校には、外国籍だったり、日本国籍でも海外生活が長かったりし、日本語の指導が必要な子どもがいる。その数は20〜30人。外国人を指導した経験のない先生が大半の中、学校現場は「どう取り組めばいいのか」と悩み、手探りで日本語や教科の学習を支援しているのが実情だ。インドネシアから来た女子児童が通う松茂町の長原小学校を訪ねた。

(社会部・藤田純)

「元気ですか?」「お元気ですか?」
「お元気です!」ではなくて「元気です!」でいいよ!」
図書室で、ワンティさん(11)本名・ワンティヌール・アフリリアンが、日本語の会話を学んでいた。昨年7月、インドネシアの学校から5年生に編入された。年齢は6年生に当たるが、両親と河西慎次校長が話し合い、日本の小学校でしっかり学習した上で中学校へ進学できるように、学年を1年下げた。

教材探しやいっしょに添え 要綱なく教員手探り



山村講師(右)から日本語を教わるワンティさん
松茂町の長原小学校図書室

指導していたのは、同校に勤務する山村久美子講師。ワンティさんの編入を受け、昨年9月から週8時間、主に国語と算数の学習

きには教室で付き添ったりしている。

来日して半年余りで、ワンティさんの日本語はめきめき上達。休み時間には、6人いる同級生とおしゃべりをしたり、インドネシアのじゃんけんをしたり。「社会の授業は難しいけれど、勉強は好きなので学校は楽しい」と言うと、級友の屋野龍也君(10)は「いろいろな話ができるようになった」とうれしそうに話した。

馴染な学校生活の陰には、松茂町教委と学校現場の強力なバックアップがある。ワンティさんの自宅は児童数が600人を超す松茂小学校の校区にあるが、目が届きやすいよう、全児童33人の長原小で受け入れた。

編入してすぐの夏休みに約20日間、長原小の教諭が2〜3時間かけて日本語を指導。河西校長は「学校を挙げて支援して」と話す。

しかし、日本語指導の課題は多い。県内の学校には日本語のできな子どもへの指導要綱などはなく、教材もない。このため長原小は教材探しから始めなければならず、外国人研修生に日本語を教えている人を見つけて借りたり、インターネットで探したり、教材購入費は河西校長が負担するなどした。

県教委によると、昨年9月1日現在、外国人の児童生徒は48人、帰国子女は49人で、小学校38校と

徳島県内の外国人児童生徒や帰国子女は少なく、日本語教育の問題は表面化していない。しかし、受け入れ校の好事例とも言える長原小を訪ね、日本語のできな児童、教える教諭らの苦勞を知った。

小規模校の同校は、大規模校よりもきめ細かな指導ができる。ワンティさんが日本語が上達してきた現在も「目立つ存在から、日本語ができるようになって見えなくなるようになった」ときの指導が大切」と考えており、支援に余力がない。同校は、両親と日本語での「コミュニケーション」は取

記者の目

が、中学校在校で受け入れている。日本語の指導が必要な児童生徒は22人おり、こうした児童が複数通う徳島市の佐古小、助任小、阿南市の羽ノ浦小の3校には、日本語指導教諭が各1人加配(定数に上乗せした配置)されている。長原小のように非常勤講師がいる学校もあるが、多くは手の空いた教諭が指導している。

国際理解深める好機に

けれども、日本語がでない保護者に情報を伝達できない学校もある。宗教上、給食に食べられない献立があるなど、受け入れ校は学習面以外の課題にも向き合わなければならない。しかし、苦勞ばかりではない。長原小の児童たちは文化の差異を感じながら、国際理解を深めている。また1人の児童を懸命に変える教諭の熱意は、学校の魅力アップにつながっているように思えた。予算や人員面から、学校や県市町村教委だけの対応には限界がある。受け入れ校の負担軽減には、日本語指導のノウハウを持つ民間団体や人材の協力が欠かせない。

「いい教材を教えてください」「ボランティアで教えるに来てくれませんか」。元教諭ら13人が日本語教師として月1回、外国人の子どものために「にほんご守子屋」を開いている市民団体「JIT M」とくま日本語ネットワーク(徳島市)には今年に入り、外国人を受け入れ予定の小中学校から相談が相次いでいる。ほとんどが支援の依頼だ。兼松文子代表は「受け入れ校の先生は本当に苦勞している」と言う。こうした市民団体が学校や県市町村教委と連携し、児童生徒への日本語指導、教諭の研修などで協力できる環境整備も求められて